

2022年、ユリイカ
に提出した原稿。編集・校
閲前。

言語の多様性と向き合う
～『エリートと教養』の考察を通じて～

「現代語について原稿を書いて欲しい」という依頼があった数日後に、家族との間でこんなやりとりがありました：

娘：沖縄行ってみたいなー

私：2年前に行く予定だったんだけどね、コロキャンになっちゃってねー

妻：「コロキャン」って単語できたの？

私：知らないけど、今作った

2年前とは2020年の春のこと、つまり「コロキャン」とは「コロナでキャンセル」を略したものです。あとで調べてみたら、この表現を作りだしたのは私だけではなかったことがわかりました。当時、就職の面接などが突然キャンセルになった時に、この表現が流行ったようです。ともあれ、このように人間は常に新しい言語表現を創造し続けます。

新語の創造に対しては、大きくわけて2つの立場が観察されます。1つは、これらを「言葉の乱れ」として否定的に捉える立場。もう1つは「実は、このような新しい表現の創造は、昔から行われてきたことであり、言語学的には筋の通った現象である」という立場。言語学者のほとんどは後者の立場をとり、私も例外ではありません。

後者の立場では、いたって冷静に現代語を分析しているようにも見えますが、言語学者が現代語について論じる背景には、「面白い例がまた出てきた！」という発見の喜びがあります。例えば、最近、複数の言語学者が「タピる」という表現を分析していますが、「タピる」とは「タピオカを飲む」という表現から1つの動詞を作りあげたものです。言語学の観点からは、「タピる」の分析として、「『サボタージュする』が『サボる』になったように、このような短縮形は昔から日本語で観察されるものであり、目新しいものではない」と冷静に書きつらねます。が、「タピる」という表現を聞いたとき、まず「面白い！」と感じ、この表現を作りだした人の創造力を賞賛するわけです。また、「タピる」や「サボる」のような新語を研究することで、「省略形では一般的に、最初の二文字を保持する」というような人間言語の特質の一面が明らかになり、さらに「二」という数字にはどんな意味があるのかを考えることで、この背後にある認知機能にも光が当たります。

さて、新語に関しては近年、川添愛先生の『ふだん使いの言語学』（新潮社）や窪園晴夫先生の『通じない日本語』（平凡社新書）などの好著も出版されていることですし、こんな私が新しく言えることはあまりないだろうと、実は、この原稿の執筆は一回お断りしました。しかし、執筆をお断りしたまさにその日に、科学哲学者である村上陽一郎先生の近著『エリートと教養』（中公新書ラクレ）を読み、「言

語学者としての立場を改めて公の場で明らかにする必要がある」と思い、本原稿を執筆することになりました。

個人的な話になりますが、私の人生は村上先生に大きな影響を受けてきました。高校1年生までは理系進学を希望していましたが、とある理由で「文転」。現代文という科目が苦手だった私は、高校の先生に「村上陽一郎の本で、読書の練習をしたら？」と薦められました。以来、研究者になった今でも、村上先生のような研究者になりたいと思っています。「理系」vs.「文系」という区別自体好きではないのですが、敢えていうならば、私は生物学・物理学・統計学なども取り込んだ「理系寄りの言語学」を研究しています。文系に分類されがちな学問に対して理系のアプローチができてるのは、文理を超えた科学的探究が可能であることを若い時から、村上先生の著作を通じて知っていたからでしょう。このようなわけで、本稿は『エリートと教養』を議論の出発点としますが、全体として「言語の多様性に向き合うことの大切さ」という一般的なメッセージをお伝えできればと思います。

さて『エリートと教養』には「日本語について」の章があります。前々から村上先生の言語観には、言語学者としては同意できない点もあり、これについては拙著『フリースタイル言語学』（大和書房）で触れました。先ほど紹介した2つの立場で言いますと、村上先生は現代語の諸相を「言葉の乱れ」として捉え、多くの若者言葉に対して苦言を呈しています。しかし、言語学的な立場から考えると、現代語に観察される様々な現象を「乱れ」として一方的に否定することは間違いであり、危険ですらあると思うのです。以下では、具体例の分析を通して、「話し方の違いに対して寛容になることの重要性」についてお話したいと思います。

まず、『エリートと教養』で批判されている「ら抜き」から始めましょう（p.143-144）。「ら抜き」とは、「食べられない」が「食べれない」のように、可能形の「られ」の「ら」を抜いて発音することを指します。Wordで「食べれない」と打つと、丁寧に「ら抜き表現」と警告してくれます。では、「ら抜き」は単なる「言葉の乱れ」なののでしょうか。「そうでもないぞ」というのが私を含め多くの言語学者が共有する考えです。具体的には、井上史雄先生が次のような議論を展開しています（『日本語ウォッチング』, 岩波新書）。

以下のような状況を想像してみてください。バスの運転手さんが、お年寄りに「降りられますか？」と尋ねたとします。運転手さんは尊敬語としてこの表現を使いました。しかし、聞いた側はこれを可能形（つまり「自力でバスから降りることが出来ますか」の意味）と解釈して、「大きなお世話です！」と反応してしまうことになりかねません。そう、日本語の「られ」には、可能・尊敬・受け身の3つの意味があります。つまり、「降りられますか？」には：

- (1) 【可能形】降りることが可能ですか？
- (2) 【尊敬形】降りますか？（私は尊敬をもって話しています）

(3) 【受け身形】誰かに降りられてしまいますか？（その結果迷惑を被りますか？）

という3つの解釈が存在します（3の解釈は、お客さんに降りられると負けてしまうゲームなどを想像すると良いかもしれません）。それに対して、「降りれますか？」は、可能形の解釈しかなく、「ら抜き」は尊敬形や受け身形では起こりません。つまり、「ら抜き」には「可能形」を「尊敬形・受け身形」から区別する、つまり「曖昧性を回避する」という機能があります。もし「ら抜き」の原因がずぼらさなのであれば、尊敬形や受け身形では「ら」が抜けない、ということに説明が付きません¹。

次に『エリートと教養』で「意味不明」とまで言われている「省略形」についてお話しします(p.134-135)。こちらに関しては『フリースタイル言語学』で詳述しましたし、他の言語学者も語っていることなので、簡単にまとめるに留めます（上記の窪菌先生の本もご参照ください）。日本語は省略形が好きです。例えばドラマのタイトルである『冬のソナタ』が「冬ソナ」になります。村上先生に限らず、このような省略形を好まない人は少なからずいると思いますが、第一に、省略形が好きなのは日本語だけではありません。カーネル・サンダースで有名な例のチェーン店は、日本語では「ケンタッキー」や「ケンタ」と略されますが、英語でも KFC と頭文字をとって略されます。省略形はドイツ語、イタリア語、韓国語、中国語など様々な言語で観察されます。

また、この省略現象は、その省略された部分が予測可能であるときに起こりやすい、ということもわかっています。情報理論の専門用語を使わせて頂くと「省略形はエントロピー（情報量）が低いときに発生しやすい」のです。例えば、話題がアメリカに関することであれば、「ロス」と聞けば「ロス・アンジェルス」の省略だと推測が可能です²。つまり、この省略は、とある文脈において、「ロス」と言えば後続する要素がほぼ確実に「アンジェルス」であるからこそ起こるのです。正月の挨拶を「あけおめ」と略すのも、元旦に交わされる挨拶が「あけましておめでとうございます」であると予想可能であるがゆえに起こります。予想可能なものは省略すると、作業効率が上がるという利点もありますね。数学でも log の底は予測可能であれば省略しますし、log は logarithm の省略形です。

さらに、省略された形を注意深く観察すると、規則性が見えてきます。具体的には、日本語は平仮名二文字（より正確には、二拍）のリズムを好みます³。例えば愛称表現を考えると、私の名前「しげと」の愛称は、「しげ+ちゃん」でも「しー+く

¹ この「ら抜き」に関する考察に関して、同僚が面白い例を教えてくださいました。「着替えているところを見られた」と「着替えているところを見れた」を比べると、2つの文の意味はどのように異なるでしょう？

² 一方、文脈によっては「あまちゃんロス」の「ロス」のような別の意味にも解釈できます。人間は常に文脈から言葉の意味を推測しているのです。

³ より詳しくは、拙著『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込む』（朝日出版社）を参照。

ん」でも「しげ+しげ」でも良いのですが、ほぼ必ず 2+2 の形が守られます。この「二のかたまり」という単位は、西洋の詩では重要な役割を担うことが知られおり、「^{いんきやく}韻脚」と呼ばれます。かつては、日本語には「韻脚」という単位はないと思われていました。しかし、「二のかたまり」が色々なところに顔を出すので、我々言語学者は「日本語にも韻脚が存在する」という結論にいたっています。「ふゆそな」の例において、削られているのは、「の」と「タ」だけであり、わざわざ一文字ずつだけ削る意味がわからない、という村上先生の気持ちもわからなくはありません。しかし、問題は削られた量でなく、削られた結果です。削られた結果が「二拍」という、日本人にとって心地よいリズムになっている点が重要なのです。

「二拍という単位が日本人にとって心地よい」ということは、日本語の詩歌の分析からも明らかになっています。日本語の詩歌で用いられる 575 のリズムも、(4)に示すように、実は休符などを考慮に入れると 888 になると言われています（ただし、(4)はあくまで例示で、休符の置き方などには様々な方法があります）。そして、この 8 拍は、「/」で示したとおり、二拍リズムが 4 回繰り返されたものです。

(4)

ふる/いけ/や・/・・・

かわ/ずと/びこ/む・

みず/のお/と・/・・・

（「・」は休符を表す）

つまり、省略形にも詩歌に現れる 575 のリズムにも、根幹には二拍の韻脚が潜んでいます。ですから、575 のリズムを愛しながら二拍への省略を嫌うというのは、実は矛盾したことなのです。

『エリートと教養』には、「日本語の素晴らしさの 1 つは助数詞の多様性にある」との旨が書かれています(p.152)。例えば、人なら「人」、本なら「冊」、鳥なら「羽」というように数え方が異なります。近年では、年齢の違いについて話す時、「弟と三個違い」というように、「歳」ではなくて「個」を用いることがあります。『エリートと教養』はそのような話し方に批判的です。この論理の背後には「助数詞が多様である話し方（≡言語）は美しく、多様でない話し方（≡言語）は劣っている」という価値判断が潜んでいます。このような価値判断を真に受けるならば、一歩間違えると、助数詞をあまり持たない言語（例えば英語）は日本語よりも「美しくない」つまり「劣っている」という発想にもつながりかねません。

もちろん、村上先生自身がこのように数助詞を持たない他言語を批判しているわけではありません。しかし、19 世紀頃には、この類いの発想がもっと極端な形で展開されたことがあります。ダーウィニズムの影響もあり、ヨーロッパで多く観察される^{くっせつご}屈折語（語形が変化して文法機能を表す言語）のほうが日本語のような

こうちやくご

膠着語（助詞などで文法機能を表す言語）よりも「進化した＝より優れた」言語であるという考えです。フンボルトの説に代表されるこの考え方は、白人至上主義と関連があった可能性は否定できないでしょう。

最近でも、このような差別的発想が現実的な問題として浮かびあがってきた印象的な事件がありました。2020年5月のことです。コロナ禍が世界を覆う中、とある日本のワイドショーで「欧米での感染拡大が日本よりも深刻であるのは、英語の[p], [t], [k]の発音において空気が多く流れるからだ」という説が紹介されたのです。この説は音声学的に考えると根拠のないものなのですが⁴、問題は「英語はウイルスを拡大させてしまう危険な言語である」という負の価値判断がここに潜んでいたことです。結果として、日本在住の英語話者からは大きな反発がありました。言語について負の価値判断を持ち込むということは、差別行動につながる危険をはらんでいるのです。言語学的な観点からは、すべての言語はどれも素晴らしい人類の財産であり、「危険な言語」や「劣っている言語」というものではありません。

次に、平板化アクセントについてお話しします。日本語は声の高さだけで意味が変わり、これを「アクセントの違い」と呼びます。例えば、「飴」も「雨」も「あ」と「め」の組み合わせですが、「雨」は「高低」、「飴」は「低高」です。また、日本語には「うさぎ」のように「低高高」で音の高さが落ちない単語が存在し、これを「平板アクセント」と呼びます。

『エリートと教養』では、ラジオDJが「リスナー」を「高低低低」でなく「低高高高」と発音するように、多くの単語が平板化されることが指摘され、この発音を「ほんとうに聞き苦しい」と表現しています(p136-138)。しかし、この現象は、若者言葉に限ったことではなく、「専門家アクセント」と呼ばれる現象の一例です（詳細は、上述の『日本語ウォッチング』を参照）。日本語では、自分の専門領域で使われる単語（特に外来語）のアクセントを平板型で発音することが珍しくありません。例えば、プログラマーは「コンパイラー」や「ループ」といった単語を平板で発音します。この平板化には、「自分がどのような専門領域に属しているのかを発信する」という機能があると言ってもよいでしょう。そもそも、「ピアノ」や「うさぎ」は普段から平板アクセントで発音されるので、「平板アクセント＝聞き苦しい」などと批判しては、これらの単語がかわいそうではありませんか。

『エリートと教養』ではwh-疑問詞の平板化についても批判がなされています(p129-130)。wh-疑問詞というのは、日本語では「誰」「どこ」「いつ」「何」「なぜ」などです。これらの単語は伝統的には「高低」で発音されます。しかし、現代語では：

(5) だれが来たの？

⁴拙著『音声学者、外の世界に羽ばたく』（教養検定）の第3章を参照。

- (6) 何を話しているの？
 (7) なんでそんなこというの？

というような文があったときに、「だれ」や「何」のような **wh**-疑問詞だけでなく、文全体を平板化して発音する現象が観察されますが、この現象は実は言語学的には理にかなったものなのです。少し意外かもしれませんが、例えば、日本語の「何」は、厳密には英語の **what** とは直接対応しません。なぜならば、「何」は「か」をつけると「何か」となり **something** という「存在」を表す意味になるのです。同様に「何」に「も」をつけると「何も」となり、否定形をとまって **all not (=nothing)** という「存在の否定」を表します。そして、「何」が英語の **what** のように疑問詞として機能するためには、「の」のような文末の終助詞が必要になります⁵。つまり、「何」は終助詞と一緒にあってはじめて、疑問詞として機能するわけです。ここで現代語を考えてみると、(5)-(7)のような文では、文全体を平板化することで、単語の切れ目がなくなり、文全体で音として1つにまとまります（図1）。「何」と終助詞が意味的につながっていることを、音をつなげることで表現していると言ってもいいでしょう。福岡方言では、これとほぼ同じことが昔から観察されると言えば、驚いて頂けるでしょうか（図2）。

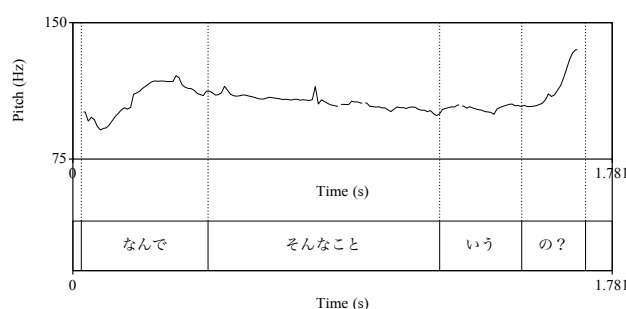


図1：平板化した「なんでそんなこというの？」を筆者がイントネーションを計測しやすい形で発音したもの。

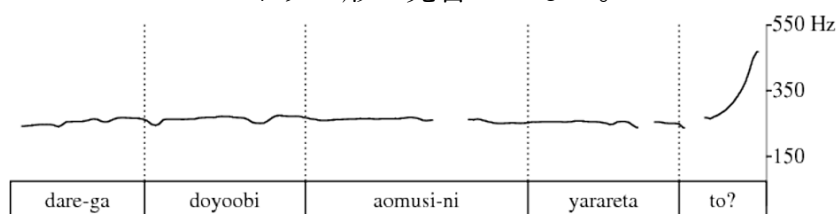


図2：福岡方言における **wh**-疑問文のイントネーション⁶。

平板化によって文がまとまる現象に関してもう一步深く考えるために、以下の文を考えてみましょう：

⁵ 「です」のあとの終助詞は「か」になります。「の」や「か」のような終助詞が落ちる場合もありますが、その場合は、文末で上昇調のイントネーションが必須になります。

⁶ Smith, J. (2013) Fukuoka Japanese **wh** prosody in production and perception. *Lingua* 124: 96-130. より引用。

(8) 誰もこなかった

(9) 何も話さなかった

これらの文をすべて平板化して発音することは不自然で、不可能ではないにしても、このような発音は人工読み上げソフトを連想させます。なぜでしょう？ それは「誰」や「何」が「も」とすでにくっついているので、平板化によって文全体をまとめる必要がないからです。つまり、wh 疑問文の平板化も理由があって起こることであると言えます。

以上、『エリートと教養』で批判されている現象について言語学的な考察をおこなってきましたが、最後に「言語に対して負の価値判断を持ち込むべきではない」ということを改めて明確にしたいと思います。他の科学分野を考えると、例えば、動物学者は哺乳類である鯨が海に住んでいるからといって「鯨は陸で生活すべし」とは言いません。鳥類学者はペンギンが鳥類なのに飛べないからといって彼ら・彼女らを糾弾することはありません。一般的に、科学というものは観察対象に対して「かくあるべし」という価値判断を行いません。ところが、こと言語に関しては、根拠のない「かくあるべし」という言明が横行しがちです。これは言語があまりにも我々の身近にあるからかもしれませんし、言語に関しては誰でも考察をおこなえるからかもしれません。しかし、言語を科学の対象と見做す限りにおいて、科学者は「言語に価値判断を持ち込むべきではない」と思うのです⁷。

とは言うものの、科学的な探究の過程で観察対象に「美しさ」を見いだすことはおかしいことではないでしょう。多くの科学者が自然に潜む法則の美しさに魅せられて、研究を続けていると言っても大げさではないと思います。私の妻の実家は東北なのですが、私は義父母が発する鼻濁音を「美しい」と感じてしまいます。しかし義父母の鼻濁音の美しさに聞き惚れたからと言って、鼻濁音を失った自らの東京方言について恥じることもないよう自分を律しています。重要なのは、言語のとある特徴を「美しい」と感じることは、その特徴を持っていない言語に対して負の価値判断を抱くことにつながってしまう可能性があることを常に頭に入れておくことではないでしょうか。

言語というものは、どの言語であってもすべて、人間の素晴らしい財産です。他の言語に比べて「劣っている」言語も「優れている」言語も存在しません。一聴「聞き苦しい」と思われる話し方も、れっきとした1つの言語体系であり、尊重されるべきです。私たち言語を操るヒトは、「言語の多様性」を認め、それに寛容でなけ

⁷ 日本語の1つの基準となる軸として、例えばNHKのような機関がいわゆる「標準語」というものを保持することに反対しているわけではありません。また、書き言葉などに規範が存在することに異を唱えるつもりはありません。砕けた話し方は「敬意の欠如」を含意しますから、目上の人と話すときに気を遣うことは重要だと思いますし、他者を傷つけるような表現などを使うことも避けるべきでしょう。

ればなりません。そうあるために私たちに必要なのは、まさに、村上先生が『エリートと教養』を含む数多くの著作を通じて論じてこられた、「自分と違った行動習慣をもつ仲間の自由度を認める寛容さ」⁸であり「教養ある態度」であると、私は確信しています。

⁸ 『エリートと教養』の p21 から表現を修正して引用。